

中国地質博物館へ寄贈された 豊 遙秋 鉱物標本

坂野 靖 行¹⁾

1. はじめに

元産総研地質標本館長の豊^{ぶんの} 遙秋^{みちあき}さんにより50年間かけて収集された鉱物標本約3,400点が、この度中国国土资源部中国地質博物館(写真1)に寄贈されました。この寄贈を記念して、2006年9月22日より1ヶ月の間、特別展「豊 遙秋先生寄贈個人収蔵標本展覧」が中国地質博物館において開催されました。その開幕式に加藤碩一産総研理事、栗本史雄地質調査情報センター長と筆者が参加しましたので、以下に豊 遙秋さんとその寄贈に関する行事の概要を紹介します。

2. 豊 遙秋さんと豊 遙秋 鉱物標本

豊 遙秋さんはいうまでもありませんが、鉱物記載の権威であり、これまでに5種類の新鉱物を記載されています。また、鉱物標本整理に関するキュラトリア

ルワーク(標本の研究, 登録と管理)の能力の高さは有名であり, 所属していた東京大学総合研究資料館(現博物館)や地質標本館所蔵の鉱物標本の整理・登録を精力的に行い, コレクションの充実にも努めました。これらのよく整理された標本は内外の研究者だけでなく, 教育・出版・報道関係者にも利用されています(豊, 1998)。

豊さんが鉱物に興味をもったのは, 11歳の時に国立科学博物館が主催する地質見学会に参加したのがきっかけでした。岩石をハンマーで割り, その中からあらわれる美しい結晶に出会い, 豊少年は鉱物の虜となりました。以来鉱物収集家として著名であった櫻井欽一博士が主宰するアマチュア鉱物同好会「無名会」に所属して鉱物に関する知識を得るとともに, 鉱物を求めて日本各地の鉱物産地を巡るようになりました。そして秋田大学鉱山学部に入學し, 東京大学大学院で本格的に鉱物学を学び, 東京大学総合研究資料館の助手を務めた後, 地質調査所に移り, 2003年



写真1 中国地質博物館の正面玄関。



写真2 豊 遙秋 鉱物標本は小型標本が中心で, 木箱に整然と並べられている。

1) 産総研 地質情報研究部門

キーワード: 豊 遙秋, 個人所蔵標本, 鉱物標本, 標本寄贈, 中国地質博物館



写真3 中国地質博物館最上階にある貴賓室。ここで開幕式直前の打ち合わせが行われた。

3月に産総研地質標本館を定年退職されました。

今回の標本寄贈は、2001年に中国地質博物館の程利偉館長が日本の博物館の視察と情報収集のため来日し、当時地質標本館長であった豊さんと面会したのがきっかけでした。その際中国地質博物館には日本産の鉱物標本がほとんどないこと、館のコレクションとして系統的に集められたものを所有していないことを豊さんは知りました。その後何度か程館長と面会する機会があり、その過程で程館長との信頼関係を築くことができ、最終的に50数年間にわたって集めてきた個人標本の寄贈を決断しました。

豊鉱物標本は、(1) 研究用の小型の標本が中心であり、それらは木箱の中に美しく整然と並んでいる(写真2)、(2) できるだけ多くの種類と多くの産地のものが集められている、(3) 日本産が約600種、外国産が約700種あり、標本の総数は約3,400点に達する、(4) 各標本にはきちんとした記載情報が付随している、つまり詳細なラベルが添付されている、といった特徴があります。

3. 特別展開幕式

2006年9月22日に開催された特別展開幕式は中国地質博物館で行われました。参加者は総勢50名程度で、日本からは豊夫妻をはじめ我々3名と豊さんの親しい友人らが、中国からは中国科学院、中国地質調査局、北京大学の研究者たちが参加しました。開幕式の直前に、豊さんと日本からの参加者は博物館最上階にある貴賓室に案内され、歓迎をうけました(写



写真4 開幕式でスピーチをする豊さん。



写真5 開幕式でお祝いの言葉を述べる加藤理事。

真3)。開幕式は、3階の特別展示場入口で開催され、まず豊さん自身によるスピーチがありました(写真4)。子供のころから現在まで鉱物と付き合い、その過程で個人的に集めた標本約3,400点を最終的にどうするか悩んでいたこと、鉱物コレクターの標本はコレクターの死後に寄贈されることが多いが、自分としては元気なうちに標本の行く末を見届けたいと考えていたこと、そんな折、縁あって中国地質博物館へ標本を寄贈することになったことが述べられました。そして永年親しんだ鉱物標本を手放すことはちょうど「可愛い娘を嫁に出す」心境であり、今後機会があれば、また娘に会いに行きたい、そしてこのコレクションが中国の鉱物学・岩石学・鉱床学の研究者に広く利用されることを希望すると述べました。

続いて加藤理事が日本の参加者を代表してお祝い



写真6 テープカット。後列左から、程館長、加藤理事、豊さん、国土資源部中国地質調査局の王学龍副局長。



写真7 標本はウォールケースの中に飾られ、鉱物記載論文別刷り、標本写真が添えられている。

の言葉を述べ、最近の独立行政法人化により地質調査所が産総研地質調査総合センターとして生まれ変わったことを説明しました(写真5)。そして今回の豊標本寄贈がきっかけとなって、中国地質関係各機関との国際交流が発展することを希望すると締めくくりました。

次に中国地質博物館の程館長のスピーチがなされました。程館長はここ最近の中国地質博物館の国際協力を紹介しました。例えば、同博物館所蔵の山東竜(白亜紀初期の山東省産のカモノハシ竜)の大型復元標本が1988年に開催された、ぎふ中部未来博に出展されたこと、現在この山東竜原寸大ブロンズが岐阜市の岐阜メモリアルパークに展示されていることが述べられ、今回の豊標本寄贈は、この山東竜に匹敵する国際交流の1つであると述べ、最後にもらった娘さんを大事にしますのでどうぞ御安心くださいと締めくくりました。

この後チャイナドレスを身にまとった女性が登場し、華やかなテープカットとあいなりました(写真6)。また今回、我々が開幕式に参加するにあたって、地質調査総合センターの英文紹介ポスター4枚を開幕式会場に展示し、中国側の参加者に向けて我々の組織の紹介に努めました。

4. 豊 遙秋 鉱物標本特別展の概要

開幕式の後、特別展のお披露目となりました。標本はウォールケースの中に展示されており、日本産新鉱



写真8 豊さんが発見し記載した新鉱物和田石の標本、論文別刷り、電子顕微鏡写真などが展示されている。和田石は地質調査所の初代所長だった和田維四郎にちなんで命名された。

物・日本の資源鉱物・日本に特徴的に産する鉱物(例えば中国では産出の少ない沸石類は豊さんが最も好んで集めた鉱物です)といったテーマごとに分類されています。標本とラベルだけではなく、鉱物記載論文の別刷り、豊さん自ら撮影した美しい鉱物の写真が鉱物標本を飾っています(写真7~9)。また豊さんが関わった地質図類も展示されています。壁には中学生から現在に至るまでの豊さんの写真が、美しい日本の風景とともに展示されており、まさに豊さんの半生そのものの展示となっています。特に巨大な豊さんの近影(写真10)と、鉱物の師匠である櫻井欽一博



写真9 名機ハッセルブラッドを用いて豊さん自身が撮影した写真.



写真11 櫻井欽一博士と若かりし頃の豊さんとの写真.



写真10 特別展には豊さんの写真も展示された。これは巨大な豊さんの近影.



写真12 周口店の大理石採掘場.

士と豊少年との大型写真(写真11)は迫力があります。今回の特別展示に用いられた標本は、コレクションのほんの一部でありその大半は収蔵庫に保管されています。特別展終了後は、特によい標本を選んで常設展示されるとのことです。

5. 豊標本寄贈記念の地質見学会

開幕式の翌日には豊標本寄贈記念の地質見学会が、リコー、中国地質博物館、日本郵船の協力により開催されました。この見学会は豊さんの古くからの友人であるリコーの江尻公一氏が最初に発案したものです。江尻氏は豊さんが特別展開幕の1年以上前から標本の分類整理をやり直す作業のため、北京に何

度も自費で通っているのを知り大いに感銘を受け、何とか豊さんの活動の意義を宣伝したいと考え、標本寄贈に関連した地質見学会を企画しました。参加者は日本人15名と中国の地質愛好家や北京大学の学生ら30名でした。案内者は北京大学の頼勇先生をはじめとする北京大学と中国地質博物館の3名の研究者で、行く先は北京郊外の周口店です。

最初に大きな大理石の採掘現場を訪れました(写真12)。大理石の層はほとんど水平で、わずかに傾いています。真っ白でまるで砂糖の粒を固めたようなキラキラ光る美しい大理石であり、彫刻用の石材として盛んに採掘されています(写真13)。約13億年前の石灰岩がジュラ紀の熱変成作用を受けて大理石になったとのこと。大理石中には稀に石英脈があり、



写真13 大理石採掘場の近くには多数の石材加工店があった。



写真15 孤山口駅線路脇にある大褶曲露頭。



写真14 大理石中の水晶。透明度が高い。写真の長辺は4.5cm。



写真16 周口店遺址博物館の正面入り口。北京原人銅像が皆を迎えてくれた。

多くの参加者が無色透明の美しい水晶(写真14)を採集することができ、皆さんうれしそうでした。この大理石は秦の時代から採掘され、故宮の階段中央の巨大彫刻や、山東省曲阜の孔子廟の石柱に使われています。そして現在では日本にも大量に輸出されているとのこと。次に見学したのが孤山口駅の線路沿いにある露頭で、ここでは13～14億年前の石灰岩とチャートの大褶曲を見ることができました(写真15)。

昼食後、世界遺産に登録されている北京原人遺跡を訪れ、そこにある周口店遺址博物館を見学しました。この博物館は既に坂本(1988)により紹介されており、その当時と展示内容は大きく変わっていないようでした。ただ北京原人の大きな銅像(頭部分のみ)が新たに博物館の前に建てられ(写真16)、記念写真

スポットとなっていました。館内には50万年前の北京原人・2万年前の山頂洞人の頭骨の模型、石器、多数の動物の骨化石が展示されています。博物館の外に出て、遊歩道を歩いていくと北京原人及び山頂洞人の発掘現場に行くことができます。ここでは骨化石は石灰岩の割れ目や洞窟を充填した堆積物中より発見されたという産状を理解することができます(写真17)。

博物館を後にして、花崗閃緑岩の採掘現場を訪れました(写真18)。花崗閃緑岩の時代はジュラ紀で、有色鉱物として黒雲母と角閃石が含まれます。豊さんはさすがに目がよく、あめ色のチタン石(スフェーン)を見つけました。最後に、この花崗閃緑岩と泥岩との接触部を観察しました。泥岩はホルンフェルス化



写真17 石灰岩の洞窟を充填した堆積物. 全部で13層確認されている. この堆積物中から北京原人が発見された.

しており, その中から紅柱石とざくろ石を採集することができました.

以上簡単ですが, 豊 遙秋 鉱物標本とこの標本寄贈に関連した行事の紹介を行ないました. もし北京に行かれる機会がありましたら, 是非中国地質博物館を訪れ, 豊 遙秋 鉱物標本に出会ってください. 中国地質博物館の住所は, 北京市西四羊肉胡同15号です. 月曜休館で, 開館時間は9:00~16:30です.



写真18 花崗閃緑岩採掘場を見学する巡検参加者.

大人一人30元です. URLは<http://www.gmc.org.cn/>です(ただし中国語ですが,,).

文 献

- 坂本 亨(1988):中国博物館紀行. 地質ニュース, no.403, 17-25.
 豊 遙秋(1998):地質標本館所蔵標本の利用-鉱物標本の例-. 地質ニュース, no.532, 49-52.

BANNO Yasuyuki (2007): Donation of Dr. Michiaki Bunno's Mineral Collection to the Geological Museum of China.

<受付:2006年10月10日>